

# 保育内容を実践に生かす取り組みとしての幼児教育祭 3

－ 効果的なチーム・ティーチングを行うために －

山	田	悠	莉
妹	尾	美	智子
鳥	居	恵	治
大	岩	み	ちの
佐	善		圭
岸	本	美	紀
水	谷	誠	孝

岡崎女子短期大学研究紀要44号 抜粋

平成23年3月1日

# 保育内容を実践に生かす取り組みとしての幼児教育祭 その3

## － 効果的なチーム・ティーチングを行うために －

山田 悠莉\*・妹尾美智子\*・鳥居 恵治\*・大岩みちの\*  
佐善 圭\*・岸本 美紀\*・水谷 誠孝\*\*

### 要 旨

「保育内容総合」の授業担当者である我々は、学生が保育5領域を総合的に捉え保育実践力につなげるための活動を支えてきた。毎回授業後に行なった学生と教員それぞれの振り返りの結果を保育5領域や具体的な項目に関連させながら分析し、両者を比較することで教員の気づき、学生の気づきの特徴を確認することができた。また、教員間で意識的な相互理解の場を繰り返し持つことで、指導に対する視点が焦点化しチーム・ティーチングに対する意識の高まりを生んだことが理解できた。保育内容総合の指導では教員と学生の双方向的理解の重要性が明らかとなった。

### Abstract

The teachers of the "comprehensive child-care" class have helped their students grasp the five child-care fields and link them to their practice. Each time, the teachers reviewed the class with the students, related the results to the five fields and their specific items, and confirmed their awareness. By repetitively trying mutual understanding among the teachers, the point of view of teaching was fixed, and the team-teaching awareness was enhanced. Thus the importance of teacher-student and teacher-teacher bilateral understanding was clarified.

### I. はじめに

筆者らは本校における「保育内容総合」の授業担当者であり、チーム・ティーチングによって学生が保育内容を総合的に捉える学習のプロセスを支えてきた。この取組の中で、学生は表現力の向上だけでなく、経験の中に生じてくる仲間との協力、軋轢などを通して、自立的な協働関係を体験し、企画力、運営力、人間関係力なども身につけていることに気がついていることが明らかとなった。また、学生たちの体験や意識は表面的なものにとどまらず、充実感や存在感などを伴う深い体験となり意識を高めることにつながった。加えて、先行研究では、学生それぞれの保育内容5領域についての理解度と期待度に着目し、5領域の実感度について分析することで、学生の期待感を継続しながらクラスの特徴、進度などを把握して指導することの大切さを実感できた。

筆者らは「保育内容総合」での取組や「幼児教育祭」を経験することによる学生の育ちを把握することで、この実践によって学生が保育内容を総合的に捉えることができるように指導を心がけてきた。学

生たちは、活動の中で起こる問題や疑問を解決しようとするときに、教員の専門性を頼りにし、それに対し我々担当者もできる限り学生の声に対応できるよう指導を心がけてきたが、担当している発表形式の学生に視点が偏りがちになることに不満を表す学生もいた。また、担当者の入れ替わりや、学生の資質の変化から指導に難しさを感じる場面もあり、教育的意図の意識化、指導内容の明確化、言語化の必要性が生じてきた。そこで、様々な専門分野の教員が集い効果的なチーム・ティーチングを行う意義を十分に発揮するためにも、教員の指導に対する意識について分析を行う必要があるのではないかと考えた。

以上のことから、本研究では「保育内容総合」を通しての教員の気づき、学生の振り返りを基に効果的なチーム・ティーチングを行うための視点を検討する。

### II. 研究方法

#### 1. 対象

(1) 本学幼児教育学科 担当教員7名

\* 岡崎女子短期大学幼児教育学科

\*\* 岡崎女子短期大学非常勤講師

- 舞台発表担当 3名
- フロアー劇担当 2名
- 運動遊び担当 2名

(2) 本学幼児教育学科第一部2年生

- 舞台発表選択 3クラス 110名
- フロアー劇選択 1クラス 38名
- 運動遊び選択 2クラス 69名

## 2. 調査の期日

2009年11月2日から2010年2月14日までの毎授業後（合計11回）

## 3. 手続き

(1) 学生振り返り調査

① 5領域について項目の実感度

「保育内容総合」の毎授業後に活動に保育内容5領域が含まれる実感の程度を5段階尺度法で調査（非常に・まあ・どちらともいえない・あまり・まったく）

② 幼稚園教育要領に示された「内容の取り扱いについての留意点を意識、体験した程度

学生に対して、幼稚園教育要領の中に示された「内容の取り扱い」についての留意点（表1）を体験と意識した程度を自己評価

表1：授業「保育内容総合」における、保育内容の体験と意識の程度

①関わった人たちとの温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わう
②興味や関心、能力に応じて全身を使って様々な活動に取り組む
③体を動かすことの楽しさを味わい自分の体を大切に
④自らが周囲に働きかけることにより多様な感情を体験する
⑤試行錯誤しながら自分の力で行うことの充実感を味わう
⑥人とかかわることの楽しさや大切さを味わう
⑦伝え合い共感し合うことなどを通して自分からかわろうとする
⑧ものを大切にする気持ち、公共心を養う
⑨数量などに関する興味、関心、感覚などを無理なく養う
⑩自分の感情や考えを伝え合う喜びを十分に味わう
⑪絵本や物語などに数多く出会い豊かなイメージをもつ
⑫文字に対する興味や関心、感覚を無理なく養う
⑬美しいもの、優れたものなど様々なことに会い、そこから得た感動を他者と共有し様々に表現する
⑭自ら様々な表現を楽しみ表現する意欲を十分に発揮する
⑮特定の技能を身につけようとする。

なお、⑮「特定の技能を身につけようとする」については、子どもたちには求めないようにしたいことであるが、保育を実践する上では養成のプロセスで身に付けておくことが望ましいと思われたため、追加した項目である。

(2) 教員振り返り調査

① 5領域について項目の実感度

「保育内容総合」の毎授業後に活動に保育内容5領域が含まれる実感の程度を5段階尺度法にて調査（非常に・まあ・どちらともいえない・あまり・まったく）

記録された11回の活動内容は表2の通りである。

表2 活動内容と記録

回数	日付	活動内容
1	11月2日	オリエンテーション 制作に関する指導
2	11月9日	テーマ・台本の完成・配役・舞台構成
3	11月16日	クラス別活動
4	12月7日	クラス別活動
5	12月14日	中間発表
6	12月21日	クラス別活動
7	1月18日	クラス別活動
8	1月25日	クラス別活動
9	2月1日	リハーサル
10	2月8日	クラス別活動
記録無し	2月12日	公開リハーサル
11	2月13日	幼児教育祭1日目
	2月14日	幼児教育祭2日目

② 教員の振り返り記録

教員は、指導後に今日の学生の姿、印象に残った発言、指導のポイント、反省について話し合い、その内容を記録した（以後これを「振り返り記録」と記す）。その振り返り記録から保育内容5領域に関わりのあるものを抽出した。

## 4. 記録の分析

学生、教員の記録をもとに(1)～(5)の分析を行った。

- (1) 学生の5領域の実感度
- (2) 項目の留意点の平均とその特徴（学生のみ）
- (3) 教員の5領域の実感度
- (4) 保育5領域を観点とした振り返り記録の検討（教員のみ）
- (5) 両者の比較

## 5. 統計処理

平均値の差の検定には、t検定、一元配置分散分析、二元配置分散分析を、独立性の検定には $\chi^2$ 検定を用いた。分析には、統計ソフトSPSS10.0Jを使用した。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 学生領域別平均値の推移

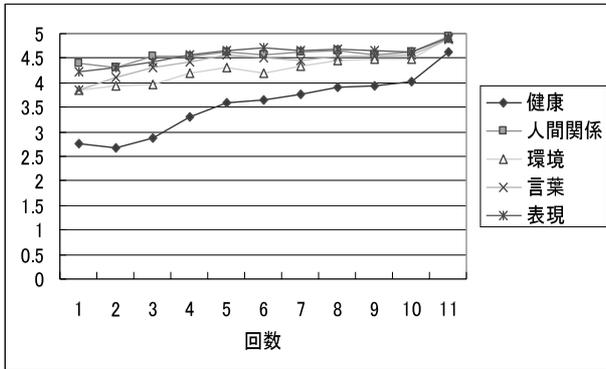


図1 学生領域別平均値の推移

「幼児教育祭」当日がどの領域も最高値となったこと、また、領域「健康」が含まれる実感が低いことは、昨年度と同様の結果であった。領域「健康」は1回目から低い数値を示しているのに対し、領域「人間関係」、領域「表現」は1回目から高い数値を示している。また、10回目から11回目にかけて大きな数値の上昇がみられる。学生は11回目の本番の時に、実際に子どもと関わったことでより5領域を強く意識理解できるようになったのではないかと推測される。

領域「健康」の数値が、他の領域よりも常に低い結果となったことについては、領域「健康」には、身体を動かす楽しさ、自らの体を大切にする気持ちなど様々な意味が含まれているが、学生の領域「健康」に対する理解の狭さがこのような結果につながったのではないかと推察する。このことについては、項目ごとの評価と照らし合わせ詳細な考察を行いたい。

#### 2. 留意点における検討

図2 からわかるように、15項目全てにおいて、「幼児教育祭」当日が平均値の最高値を示した。これは、昨年度の調査と同様の傾向であった。

15項目のうち1番上昇したのは⑬「美しいもの、優れたものなど様々なことに会い、そこから得た感動を他者と共有し様々な表現する」であり、1.92点増加した。次に増加が大きかった項目は、⑭「自ら様々な表現を楽しみ表現する意欲を十分に発揮する」であり1.79点増加した。ついで、昨年度の調査で一番増加傾向にあった③「体を動かすことの楽しさを味わい自分の体を大切にしようとする」も1.65点増加した。このことから、活動をする中で、ただ技能を身につけるだけでなく、表現する過程を楽し

む気持ちを持ち、身体を動かす楽しさを体験していたことが理解できた。このことから、領域「健康」との関連、領域「人間関係」の実感度の増加との関連も推察できる。

また、⑫は、初回一番数値が低い項目であったが、活動を通じて、文字への興味や関心、感覚も、身につけていくものとして捉えられたのではないかと考える。1回目は項目ごとの差が開いていたが、7回目から項目ごとの差は縮まり、10回目、11回目にかけて大きな数値の上昇が見られる。子どもと実際に関わることで、項目の実感度が急激に増し、意識理解につながったことが明らかとなった。

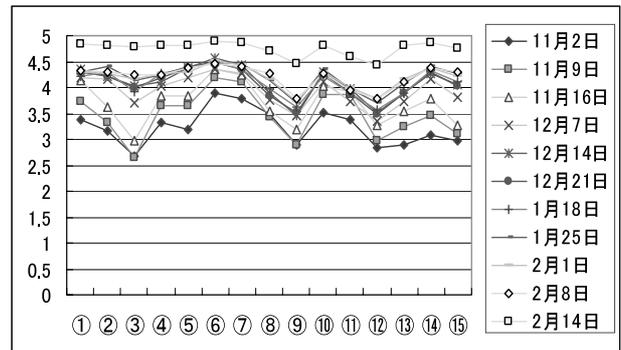


図2 留意点における平均値の推移

#### 3. 教員領域別平均値の推移

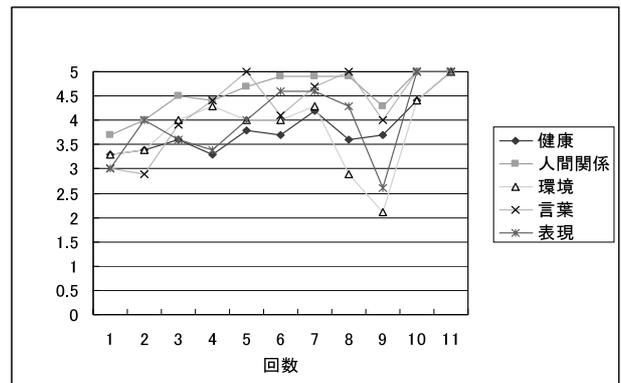


図3 教員領域別平均値の推移

昨年度の学生を対象とした調査と同様、発表当日にどの領域も最高値を示した。また、領域「人間関係」は1回目から比較的高い数値を示し、領域「健康」は低い数値を示している。領域「人間関係」の数値の高さは、この活動の特徴である他者とのかわりの重要性を教員も意識していることが読み取れる。また、リハーサルを行った9回目の調査では、領域「健康」を除く4領域で数値の低下が見られた。リハーサルの指導を通して、準備不足、仕上がりの遅滞からくる焦りが見られたのではないかと推測される。11回を通して多少の上下はあるものの全体的

には数値の上昇が見られ、本番への過程の中で段階を踏んだ指導を行っていたことが理解できた。子どもと直接かかわる発表当日の数値の高さは、5領域に対する総合的理解の重要性をより鮮明とした。

#### 4. 教員「振り返り記録」の分析

##### (1) 領域「健康」

「身体が大きく動くようになってきた」など学生が十分に身体を動かす気持ちよさを体験し、自ら身体を動かそうとする意欲を育てるための助言、励ましを繰り返し、学生の姿から教員がその成果を実感している様子が読み取れた。加えて、「欠席や遅刻が目立つ」「試験や補講が重なり体調を崩す学生もいる」など健康管理の課題も挙げられ、活動を意欲的に行うためには、心身の健康と基本的な生活習慣の形成が大切であることを確認した。

##### (2) 領域「人間関係」

人間関係に関する記述が多く見られ、「一部の学生の負担が重い」「仲間のことで個別に相談に来る学生が増えた」など学生の消極性や、学生同士の軋轢を心配する声があった。しかし、本番への過程の中で「言いたいことを言い合えるようになった」「まとまりが見えてきた」「アイデアや工夫を声にする学生が多く見られるようになった」などの意見から、教員が学生自ら考えようとする気持ちが育つように繰り返し助言したことで、学生は新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わっていたのではないかと推測できる。学生の姿を教員間で意識的に共有することはチーム・ティーチングの効果をより高めることにつながった。

##### (3) 領域「環境」

学生自身が他者の考えに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わうことを目的とし、付属幼稚園児や他の学生を招いての公開リハーサル機会を設けた。その中で、学生が観客と関わることで生み出す環境に気づくよう促し、「立案する際に子どもの安全に配慮するよう助言した」「子どもの目線で考えるよう指導した」など、学生が自ら考えようとする気持ちの育ちを願って指導を重ねていったことがわかる。

このような指導により、「お客様から見えないところに大道具の置き場所を移動していた」など舞台以外でも安全でよりよい環境作りに配慮しようとする学生の姿が生まれ、このような他者を気遣う姿か

らは領域「人間関係」との関連もみえた。

##### (4) 領域「言葉」

「子どもにもわかる言葉を選ぶよう指導した」「アドリブに柔軟に対応できるようにするためにはどうしたらよいか」などの上演内容に関するものから、「言いたいことを伝え合えない」「指導内容を言葉どおりに受け止めて自ら工夫しようとする姿がみられない」など、保育現場でも必要な関係調整力の不足を指摘する声があった。

教員からの一方的な指導による向上ではなく、学生同士の気づき合いによる向上を願い、学生間での言葉による伝え合いができるように繰り返し励まし、話し合いの中から課題を解決していくよう助言した。話し合いによる育ち合いは、教員間においても同様の傾向が見られた。

##### (5) 領域「表現」

「役になりきって演じてほしい」など学生の表現力の向上を望む意見から「運動遊びにも表現を取り入れたい」と表現に対して意欲的な姿や「生き生きと表情豊かに演じられる学生が増えてきた」など表現力の向上を実感する意見へと変化していった。教員が、学生の表現する過程を大切にして、自ら自己表現を楽しめるように、段階的に指導を行っていた様子が窺える。

#### 5. 両者の比較

##### 1) 領域別平均値推移の比較

両者の領域別平均値の推移を比較してみると、どちらも発表当日が最高値を示している。本番の活動を通して、子どもと関わりを持つことで両者が5領域を強く意識できたことが明らかとなった。

また、教員に見られる9回目の急激な数値の低下は学生には見られなかった。9回目のリハーサル後に教員が感じた準備不足、仕上がりの遅滞からくる焦りを学生が認識していないことが読み取れる。教員はリハーサル後にこれまでの指導を振り返り、本番に向けてさらに指導が必要な点を強く意識したため数値に急激な低下がみられたのではないかと考えられる。対照的に、学生の数値にはわずかではあるが上昇がみられる。間近に迫っている本番に向けて、教員の指導をプラスに受け止め、モチベーションを下げることなく活動を続けようとする、学生の前向きな気持ちの表れではないかと推察される。次項では、さらに詳細に分析するため、各領域別に比較を

行う。

## 2) 各領域における教員と学生の比較

### ① 領域「健康」における比較

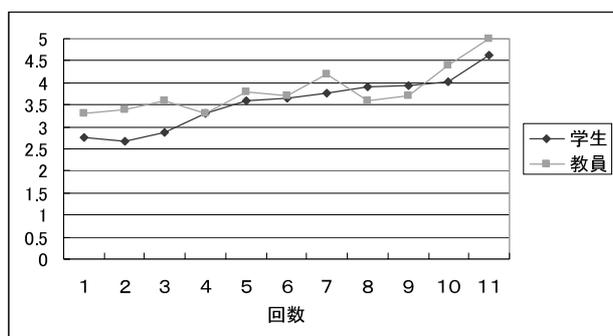


図4 領域「健康」

他の領域と同様に、両者とも本番が最高値を示しており、両者の推移の特徴は、活動の初期段階では低い数値を示し、回を重ねるごとに緩やかに上昇していく傾向がみられた。学生は1回目に2.75点と低い数値を示しているが、11回目には4.64点と5領域の中で一番伸びが見られた。この数値の伸びからは、活動の初期段階では身体を動かす機会が少ないため実感が低いが、回を重ねるごとに身体を動かす楽しさを知り、積極的に活動を行ってきた様子が理解できる。また、時節柄体調を崩しやすい時期であるため、教員も学生も体調管理の重要性を強く意識していることが影響しているのではないかと考えられる。体を動かす楽しさを実感し、自らの体を大切にしようとする気持ちを大切に指導してきたことが理解できた。

### ② 領域「人間関係」における比較

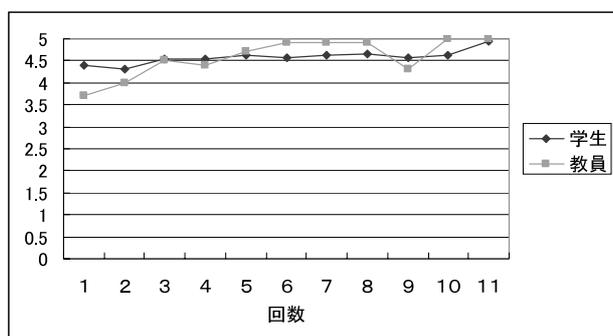


図5 領域「人間関係」

領域「人間関係」の特徴として、1回目の調査から5領域の中で一番高い数値を示している。特に、リハーサル前にあたる8回目は学生4.65点、教員4.9点と高い数値を示し、11回目の本番では、学生は4.93点教員は5.0点と5領域中一番となった。

このことから、本番までの過程の中で、人と関わ

ることの楽しさ、大切さを実感していること、自ら他者に働きかける中で、多様な感情を経験しながら、学生間で起こる軋轢さえも人間関係を構築するための重要なプロセスの1つであると強く意識していることが読み取れる。このような他者との関わりの積み重ねが、領域「人間関係」についてより深く実感することにつながっていると考えられる。加えて、学生間だけでなく教員間でも同様の傾向がみられ、相互理解の重要性をより強く認識させる結果となった。

### ③ 領域「環境」における比較

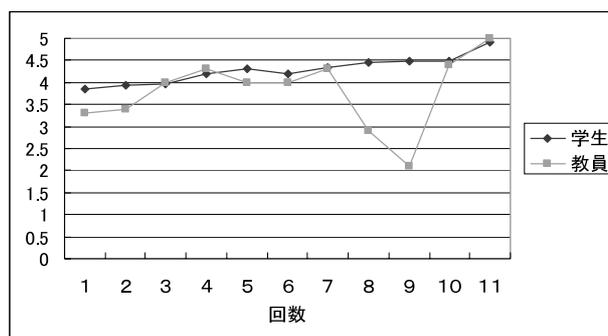


図6 領域「環境」

領域「環境」の傾向として、リハーサル前の8回目と、リハーサルを実施した9回目に、教員と学生の間大きな差異がみられた。教員の数値は8回目に4.3点から2.9点となり、10回目にはさらに2.1まで低下している。反対に学生は、4.45点からわずかではあるが4.49点と上昇がみられた。教員は学生の環境整備の悪さを指摘し、指導を行ったため教員は領域「環境」を強く意識したが、学生自身には影響が少なかったことから、ものを大切にする気持ち、公共心を養うことの大切さを学生があまり実感していなかったのではないかと考える。しかし、10回目に行なった付属幼稚園児を招いての公開リハーサルでは、教員の数値は2.1点から4.4点と大きな数値の上昇がみられた。本番が近いという焦りから、周囲に目をむける余裕のなさから、環境整備の悪さが生まれていたが、教員の指導によって学生たちの意識が高まり、また、実際に子どもたちと活動したことで、より強く環境整備の重要性を意識した学生の姿が教員の数値の上昇に影響を与えているのではないかと考えられる。一方的な指導ではなく、学生と教員との双方向のやりとりが意識の深まりを生むことが明確となった。

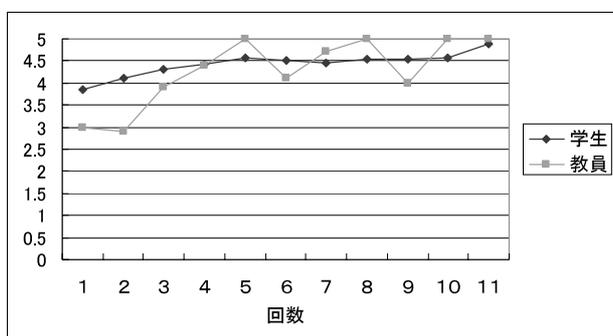


図7 領域「言葉」

#### ④ 領域「言葉」における比較

領域「言葉」の特徴として、学生の数値は、3回目から、10回目にかけて4.4点から4.7点の間で変化の少ない横ばいの状態となった。それとは対照的に、教員の数値は激しい変動を繰り返している。特に、中間発表、リハーサルを行なった5回目、8回目に数値の上昇が見られる。教員間で行う振り返りの中で、言葉による伝えあいが活発に行なわれたことが変動に影響をもたらしたのではないかと考えられる。しかし、学生の結果は常に高い数値を示し変動がなく、10回目から11回目の数値の上昇が見られる。活動全体を通して実際に子どもとコミュニケーションをとるなかで、子どもにわかりやすい言葉を選ぶようとする意識が働いていること、学生同士、教員間、学生と教員の間で積極的に言葉による伝え合いが行なわれていたことが読み取れた。

#### ⑤ 領域「表現」における比較

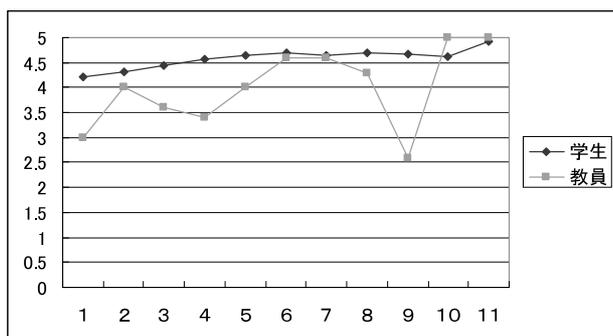


図8 領域「表現」

領域「表現」の特徴として、学生の結果は、5回目から10回目まで4.6点から4.7点の間ではほぼ変化がない状態が続いている。また、9回目のリハーサルを行なったときに教員と学生の数値に大きな差異が見られる。教員の数値は、4.3点から2.6点に大きく下がっているが、学生の数値は変化が見られなかった。教員は、9回目に行なったリハーサル後に行なった指導を通して、課題や不足点に気がつき、学生の表現力の向上を強く望んだことが結果として表れて

いるのではないかと推測できる。また、学生は本番にむけて、表現することに慣れ、表現する過程を楽しみながら取り組んでいる様子が窺える。これは、自己表現の過程を楽しもうとする学生の姿の表れではないかと推測する。領域「人間関係」との関連を見ると、同じように初回から高い数値を示しており、学生が、まわりの仲間を受容されることで、表現に対する意欲がより高まり、伸び伸びと表現することができるようになってきた様子が窺える。

#### IV. まとめと今後の展望

今回の検討からは、学生、教員共に当日実際に子どもたちとかわることが与える影響の大きさを改めて確認できた。また、本番に向けての準備の過程の中で、徐々に「保育内容」が活動に含まれているということを実感していき、学生が保育内容を総合的に捉えていく姿や過程が理解できた。

領域別の比較では、学生と教員の特徴的な差異が見えた部分があくつかあった。この特徴から、我々教員はこれまでの指導経験から過去の学生と比較し、要求してしまうことがあるが、過去の学生と今の学生を比較するのではなく、まずは教員が今の学生を受容することの必要性を強く感じた。それは、学生に求める水準を下げるということではなく、学生のありのままの姿を柔軟に受け入れ、成長するための支援を丁寧に行っていくことの重要性を示しているのではないだろうかと推察できる。

このように、教員間での意識的な総合的理解の場を繰り返し持つことで指導に対する視点が焦点化し、保育内容総合の指導では、教員と学生の双方向的理解の重要性が明らかとなった。様々な分野の教員が意見を交わし、協力し合うことで、学生と教員が共に作り上げているということがより意識化されチーム・ティーチングに対する意識の高まりを生んだ。このことから、教員による振り返りが、チーム・ティーチングの効果を高めるための有効な手立てとして働いていることが理解できた。

以上のことから、効果的なチーム・ティーチングを行うためには、教員間での意識的な総合的理解の場を設定すること、教員と学生の双方向的理解が必要であることが明らかとなった。

「保育内容総合」の授業において、保育内容の捉え方、取り組み方もそれぞれに異なる7人の教員が、効果的にチーム・ティーチングを行おうと連携する姿勢が学生の意欲に伝播し、我々教員間の姿勢がモ

デルとして学生に映っていることを強く願う。今現在、学生が経験していることを将来の保育実践に生かすことができるよう、保育内容の基本的な考え方や組み合わせの方法ばかりではなく、保育者間で協同的に仕事を進めていくことや保育者組織の中で主体的に役割を果たそうとすることの大切さを、実践の中から意識、体験してほしいとも願っている。

次年度から開講される「教職実践演習」の目的にもつながる取り組みであることから、スムーズな移行が図れるよう教員間の連携をさらに強めていきたい。

#### 【引用文献】

- 1) 岸本美紀・妹尾美智子・鳥居恵治他、「保育内容総合」を通しての「気づき」－効果的なチーム・ティーチングを行なうために－。全国保育士養成協議会第49回研究大会研究発表論文集。p118-119. 2010
- 2) 岸本美紀・妹尾美智子・鳥居恵治他。保育内容を実践に生かす取り組みとしての幼児教育祭2－保育内容の理解を深め、実践につなげるために－。岡崎女子短期大学研究紀要。第42号。p23-30. 2010
- 3) 岸本美紀・妹尾美智子・鳥居恵治他。「保育内容総合」を通しての「気づき」－保育内容を理解するプロセス－。全国保育士養成協議会第48回研究大会研究発表論文集。p50-51. 2009
- 4) 岸本美紀・長柄孝彦・妹尾美智子他。保育内容

を実践に生かす取り組みとしての幼児教育祭－「幼児教育祭」を保育現場につなげるために－。岡崎女子短期大学研究紀要。第42号。p11-16. 2009

#### 【参考文献】

- ・大岩みちの・妹尾美智子・本山益子。舞台発表を通しての「気づき」(その2)－保育内容を意識することをめざして－。全国保育士養成協議会第46回研究大会研究発表論文集。2007
- ・大岩みちの・妹尾美智子・本山益子。舞台発表を通しての「気づき」(その2)－保育内容を意識することをめざして－。岡崎女子短期大学研究紀要。第41号。p17-22. 2008
- ・文部科学省。『幼稚園教育要領』〈平成20年告示〉。フレーベル館。2008.4
- ・文部科学省。『幼稚園教育要領解説』。フレーベル館。2008.10
- ・厚生労働省。『保育所保育指針』〈平成20年告示〉。フレーベル館。2008.4
- ・厚生労働省。『保育所保育指針解説書』〈平成20年告示〉。フレーベル館。2008.5

#### 【付 記】

この研究は、全国保育士養成協議会第49回研究発表論文集及びポスター発表を加筆修正したものである。